

——語り伝えること——

(一) 寺祿を辭退して檀家を願ふ

藩主二十九代重信公時代と聞く、當時の風潮として各宗諸山寺祿を食み寺格の高下を争はんとする時代、當山に對しても寺祿を下賜すべき内達を受けたる所、時の住持深く考ふるところあり、且寺祿に晏如たるを、屑しとせず、寧將來の爲檀家を増し護法百年の計を樹つるに如かずとなし、強て寺祿を辭退し其旨藩に申出でたるに藩廳之を容れ寺祿に相當する侍士壹百軒を新たに附檀せしめられたり、住持上人の心事高明とその先見の明轉た敬仰に堪へざるところなり、今日當山の檀家に名門多く現に重要な地位にある名士の多きは獨り當山の永久に誇とする所なり。

右は從來確かなる事實として口碑に傳はる所にして、第一章に記すべき事項に屬し不肖銳意之が文獻を求めたるも未だ發見に至らず、その住持上人も寛文三年當山移轉直後か或は貞了院殿葬送前後の年代と思はれ則第五世日生上人か。若くは第六世日普上人時代ならんも是亦判定するの資料無きを憾とす、一面却つて其上人の判明せざるこそ寧懷しく又尊く思はるゝに依り暫く紋上の梗概を記し他日の涉獵研鑽に待つことゝせり之を諒せよ。

(二) 日明上人の剛勇

第十四世日廣上人代客殿の修築を爲すに當り境内山上の巨松を伐採しその用材に充たり檀信徒十餘人か運搬に奉仕せり弟子日明上人亦之に加はり坂路擔出中前方の數人躓き仆れその跳にも一齊に仆れ危く其下敷とならんとせり上人後部にありこの時滿身の金剛力を發揮し獨力能く之を支へ辛ふして危難を免れしめたり上人この時肩胛と脚部を傷け終身跛足となりしと云ふ、世呼んで跛行上人と稱せ

晏如^{あじ}||安んじておちつくさ

ま。

屑^{いさまし}||屑しとせず心よしと

しない。